NO. 39. 1997. 5.

貴重なデータを収集し

視察団が無事帰国！

しました。

【ゼレムリヤ村で聞き取り調査をする代表団】
右から、竹内さん（現地スタッフ兼通訳）
・神野さん（看護婦）・松浦さん（臨床検査技師）＞

去る 5月14日に日本を出発した、ウクライナ視察団（臨床検査技師・看護婦を含む5名の代表団）が、移住者の村（ゼレムリヤ）での『アンケートによる健康調査』などを初めとする、たくさんの仕事を終えて、5月28日、全員元気に帰国しました。

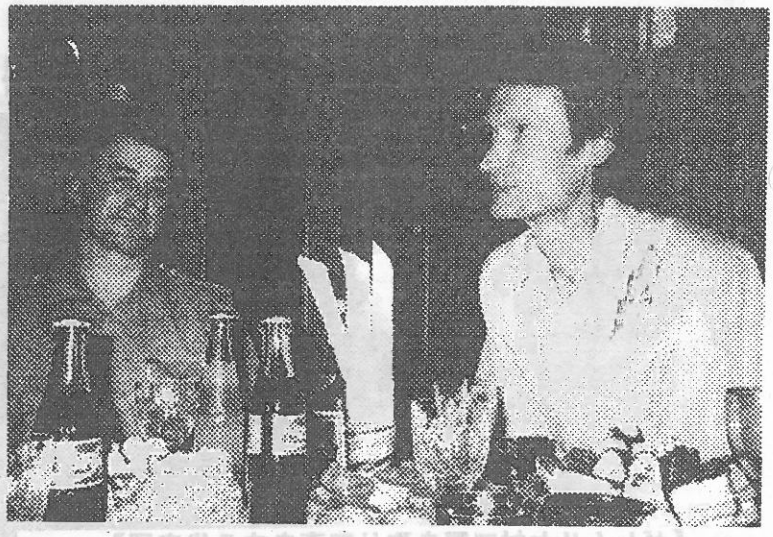
今回は、チェルノブイリ事故当日から現在に至るまでの11年間、休む暇もなく続く事故処理作業に対して、献身的に従事してきた消防士たちから、『事故処理作業の様子や現在の暮らしぶり』について、聞き取り調査を行ったり、ナロジチ病院の「給水・給湯設備工事」の完成確認なども行ってきました。これらの調査結果は、ひとつずつ、ていねいに、整理・分析され、今後の救援活動の貴重なデータとして生かされます。

詳しくは、次号の「ポレーシェ」にてご報告します。まずは、ホットなウクライナの気候（実際に、最高気温が29℃の暑い日々だったようです）、ホットなウクライナの人々との出会い、そして、“ほっ”とな帰国直後の感想をどうぞ！

《事務局》〒466　名古屋市昭和区楽園町137－1－10
チェルノブイリ救援・中部　代表：神野英樹
【郵便振替】00880－7－108610
☎FAX:052－836－1073　（月・水・金・10:30～15:30）
（問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、なるべく郵便でお願いします。）

<森を焦がす季節に>

ウクライナの美しい季節は、同時に、空気が乾燥した、森を焦がす季節でもあった。自然発火による火事が頻発し、とりわけ、汚染地域の火事が、消防士たちを緊張した日々へと引きずり込んでいた。食事のあい間には、「雨が降って欲しい」という彼等の切実な声も耳にした。『事故処理作業者からの聞き取り調査』は、そんな彼等の最大限の協力のもとで進められた。事故から11年が過ぎ去ってなお、チェルノブイリ原発事故と、さまざまな病気との因果関係を証明できる人間はいない。（もちろん、無関係を証明できた人間もいないが…）



しかし、厳しい現実として、目の前に、甲状腺疾患を患った11才のオリガちゃんとその父親がいる。様々な後遺症に苦しむ事故処理作業者達がいる。ところが、彼等は、ただ単に「待つだけの人々」ではなかった。ましてや、「諦めてしまう人々」でもなかったのである。その病気や暮らしの厳しさを、あるがままに受け止めながら、現実を放り出さずに生きている人々がそこにいた。

“生”に対する努力は、私達をはるかに越えているのかもしれない。だからこそ、今日もまた汚染地の災害へと赴く彼等に、エールを送りたいと思う。たとえ、 8,000キロメートル離れていても、時空を超えて、彼等と共に生きたいと思う。　（山盛三千枝）

<ゼレムリヤ村再訪>

『目の前に、治療を待つ患者さんがいる。しかし、治療をするための医療機器も医薬品もない。…』

昨年訪問した時、ゼレムリヤの診療所は、私にあまりにも悲しい現実を見せつけた。今回、再びこの診療所を訪れた時、決して多くはないけれど、棚には私達が送った医薬品が並び、心電計や電気治療の機械が置かれ、驚くべき事に、地区病院の救急部門で働いていたユーリ内科医が診療所の所長として、にこやかに私達を迎えてくれたのである。

私達の医療支援が、わずかずつではあるが、実を結ぼうとしている事が実感できた。彼等は、私達から届けられた医薬品をとても大切にしている。いつ・誰に・どんな薬を渡したのかという記録を見せてくれた。もちろん、私には読めなかったが、一字一字に感謝の気持ちを込めるかのように、とてもていねいに書かれていた。　（神野美知江）

<日本で学んだ医師達との出会い>

満開のカシタン（マロニエ）とライラックの花に迎えられた私達の旅は、ポプラの綿毛が舞い始めたキエフで終わろうとしています。ゼレムリヤ村の診療所は、新任のユーリ所長を迎え、保健医療活動の充実を図ろうとしていますが、経済的困難は、それをゆるさない状況が続いています。救援・中部の『医師研修プログラム』に参加した、バロージャ医師（パラノフカ病院前院長）・チムト医師（州立小児病院）・ゲメンチュク医師（同）に再会し、医療現場の状況を伺う事ができました。

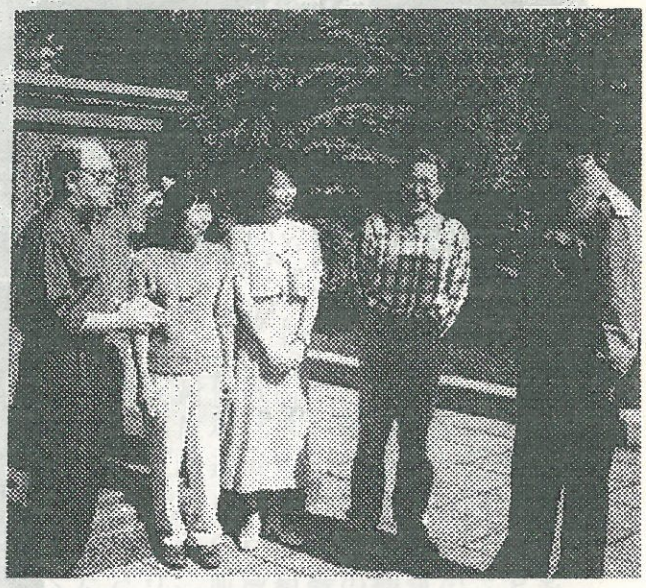
医療従事者間の情報交換は、医療支援に欠く事のできないものです。彼等と、より良い関係を保ち、的はずれな支援にならぬよう、変化する状況をとらえる努力を惜しんではならないと改めて感じています。

（松浦千秋）

<新たな局面を迎える救援活動>

美しく豊かな大地、厚い人情、確実に進行している放射線障害、その障害と懸命に闘っている人々の存在、その闘いに水を差すように機能する官僚制…。一つ一つの印象が、私の頭の中でうまく結びつかない。

ただ一つ、はっきりしていることは、放射線の特性と11年間という時間の経過によって、「チェルノブイリ原発事故の被害は、ますます、被害者の生活そのものと切り離せなくなっている」という事である。私達の救援活動は、明らかに新たな局面を迎えつつある。　（田中良明）



<左から、キリチャンスキーさん（移住基金）・橋本さん・山盛さん・田中さん・アントニュークさん（消防所長）>

<散歩する風景>

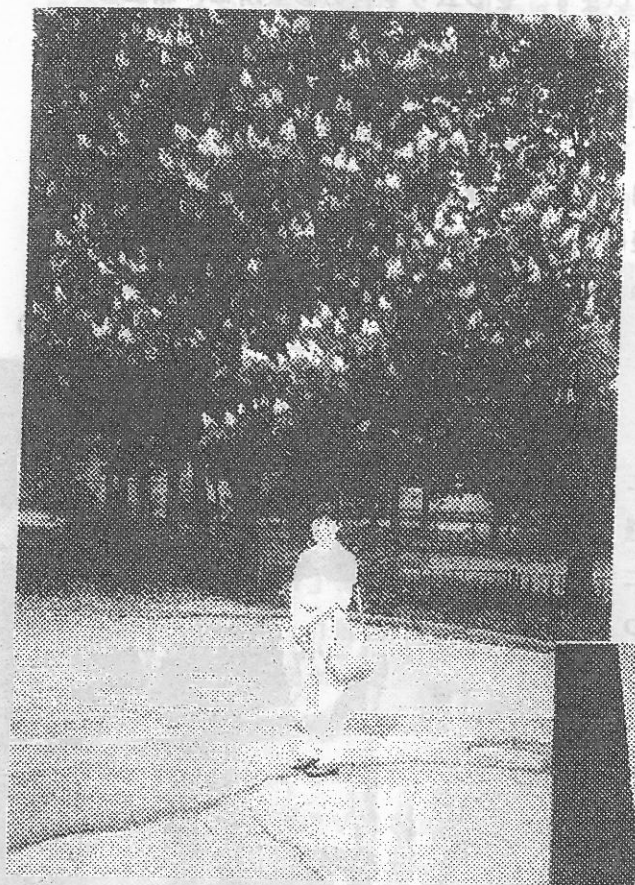
最初に訪れたのが、ナロジチ地区です。ナロジチ病院の給水給湯施設の18か所全部を、原さんと一緒に工事をした人の案内で見学しました。すべて順調でした。

マロニエ、ライラック、リンゴ、タンポポ、スズランの花ざかり、緑あふれる町の半分以上は、無人の家です。でもこの町の出生率は上がっていて、乳母車をひく、若いお母さんが、マロニエの並木道を散歩する風景は、絵のように美しいのです。

この美しい町が、放射能に汚染されて人の住めない町になったという事実は、とても受け入れられない気持ちでした。お別れに、院長のお孫さんがくれた、忘れな草の花のブルーが今でも眼に残っています。

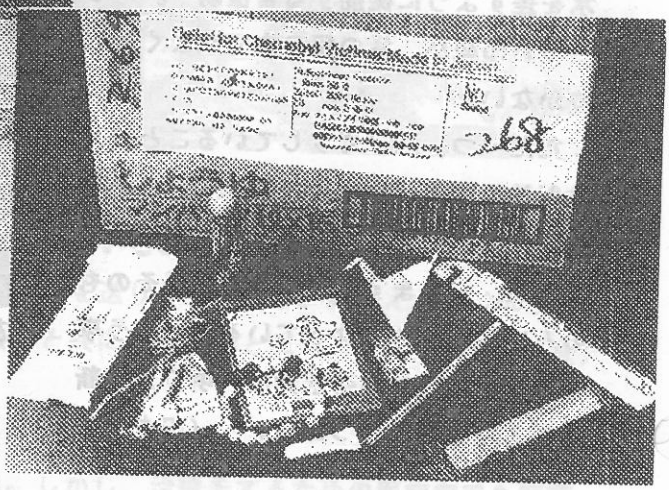
（橋本京子）

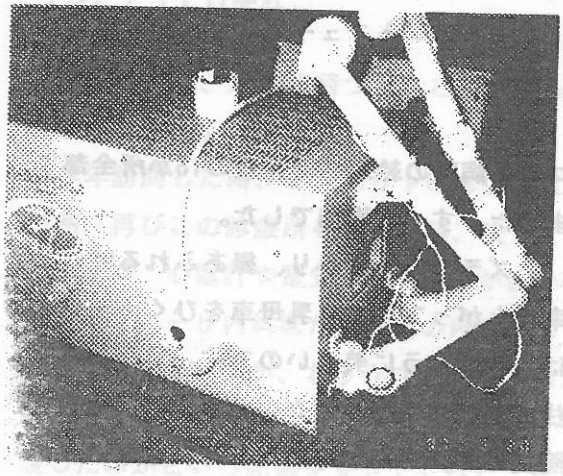
ウクライナで撮った写真３態



左：ジトーミル市内。街路樹はマロニエの花の真っ盛り。
春はウクライナが美しくなる季節。
（モデルは豊橋の橋本さん）

下：１月に粉ミルクと一緒に送った雑貨。鉛筆、シャンプー、歯ブラシなど、一個につき数グリブナ（約500円）の申告料が取られる。救援物資がかえって現地の負担になる場合もある。ウクライナのこうした政策には国際的な反発もある。





左：移住者の村、ゼレムリャの診療所。私達が送った、温熱治療器。このおかげで、住民は９Ｋｍ離れた地区病院に行かなくても良くなった。

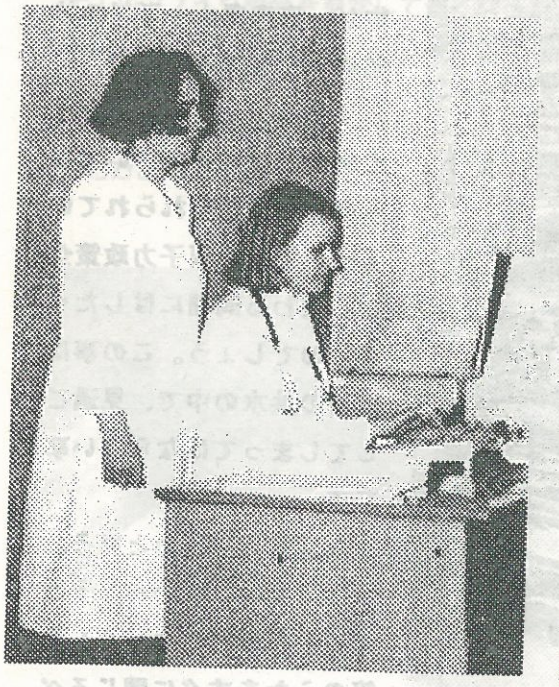
チェルノブイリ救援・中部　様　　'97.5.20

親愛なるお友達！

みな様の国での医師研修にお招きいただき、どうもありがとうございました。

私の専門、小児血液疾患と心臓疾患は、私たちの州とウクライナにとって、大変切実なものです。それは、チェルノブイリ惨事の後、こども達の間に、急性白血病と貧血症を発病するものが増大しているからです。わが州では。チェルノブイリ原発事故に関係するこどもの発病は、1,438人です。多くのこども達に甲状腺肥大が見られ、甲状腺癌が増えています。私たちは、自分のこども達の健康と将来を恐れています。　私は、ジトーミル州立小児病院の血液部門で働いています。そこでは、急性白血病、貧血症、紫斑病、先天性心疾患…などのこども達が治療を受けています。私たちの病院は、日本から大きな援助を受けています。そのことに総ての被災したこどもと、その親達からみな様に心からお礼申し上げます。

しかし、現在私たちは、こども達の腫瘍を治療するための医薬品や、輸血用の血液、その他にも多くの問題を抱えています。病院には、私たちのこども達を治療するため、その親や医療従事者が設備を整える為の、ボランティア基金があります。



右がザハルチュク医師。
ジトーミル州立小児病院にて

私が、医学研修をしている浜松の医科大学では、高度な技術を持った血液学や心臓病学の医師達が働いています。私が指導を受けている、本郷医師は、多くの興味ある、又私の仕事に有効なものを見せてくださり、血液組織の病気のこども達の治療の概略を、話してくださいました。それは、小児科医の私には、血液学・腫瘍学・心臓病学の知識を深めるためにとても大切なことです。

私は、チェルノブイリ惨事の被災者である、ウクライナのこども達の治療の為に、知識を役立てたいと思っています。

さらに、私が生まれ育ち、今まで住んでいた私の小さな故郷、ナロジチを代表して、また、チェルノブイリの総ての被災者を代表して、みな様のご支援に、お礼申し上げたいと思います。

敬意をこめて

オリガ・ザハルチュク

それは、動燃の問題ではなく、政府の原子力政策の問題です。

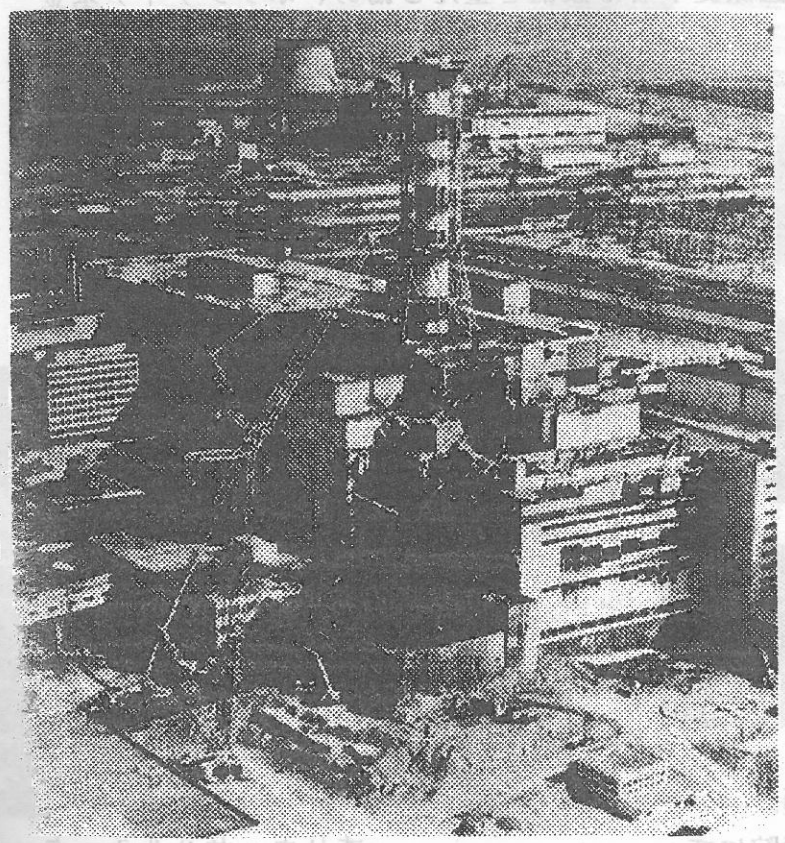
今回の、動燃による「事故隠し・嘘つき」をきっかけに、一気に、動燃の解体とか、原研との合併が、取りざたされています。しかし、なぜ「動燃」などという組織ができたのでしょうか？

種明かしをしましょう。そもそも、日本には、すでに１９５６年に作られた、日本原子力研究所（原研）という組織がありました。にもかかわらず、１９６７年に「動力炉・核燃料開発事業団法」を制定し、電力業界・原子力メーカー・科学技術庁・通産省の「寄り合い所帯」として、彼等が、自分達に都合良く使える別組織「動燃」を、わざわざ作ったのです。

「高速増殖炉の開発・核燃料リサイクルの研究」が、主たる任務であり、既に、設立から、３兆１０００億円もの政府資金が投入されています。

国も原子力業界も、動燃に悪口・雑言を浴びせて、責任をなすりつけようとしていますが、こんな動燃を作ったのは、当の本人達なのです。

今回の事故は、「高速増殖炉の破綻」、核燃料リサイクルの根幹をなす「再処理・プルサーマル計画の破綻」そのものを意味します。



３月１１日の事故の直後、３月１８日に、核燃料廃棄物が、青森県六ヶ所村の核燃料サイクル基地に搬入されました。しかし、東海村の事故との関連については、新聞でも数行触れられているだけです。原子力政策全体に関わる問題にはしたくないのでしょう。この事は、情報の洪水の中で、見過ごしてしまってはならない事です。

人間は、原子力という、開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまいました。箱のふたをすぐに閉じるべきです。それが私達のできる唯一の事です。（市川）

＜チェルノブイリの悲劇を繰り返さないために＞

連載 9

汚染地域の異変（2）

チェルノブイリ原発の周囲30Kmゾーンの住民は強制的に疎開させられ、無人地帯となっています。考えれば当然の事ですが、そのためにこの中は野生動物の天国となりました。私達が1993年に原発を見学にゾーンの中に入ったときのことです。猛スピードで走る車の前を盛んに野兎や猪（あるいは野生化した豚）などが横切りました。野生動物にとっては人間が最もやっかいな天敵です。動物達は人間のいなくなったゾーンの中で盛んに繁殖しているようです。しかし、そこに生えている餌の植物や木の実は放射能で汚れているのです。

彼らにとって「今の豊かな生活」は実は「恐ろしい危険をはらんだ未来」を準備しているのです。

チェルノブイリ原発を見学して遅くなった私達は、真っ暗な林の中を車のライトだけを頼りに走っていました。来るときと同様、野兎が光に誘われて飛び出して来るので危なくて仕方がありません。

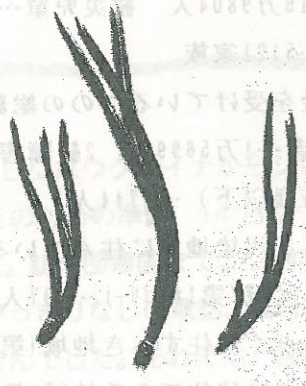
突然、どすん！と大きな衝撃があって、車が止まりました。運転手さんが何やらあわてて降りていきました。私達もそれに続きます。懐中電灯の光の中には大きな鹿が倒れていました。まだひくひく動いています。

あっと云う間の出来事で、運転手さんはハンドルをきる余裕もなかったのです。本当にかわいそうなことをした、と皆言葉も出ませんでした。私はとっさにカメラのシャッターを押していました。

帰国してからの事です。出来上がった写真をみて驚きました。倒れた鹿の後足の付け根に大きな腫瘍らしき物が見えるのです。30Kmゾーンが野生動物の天国、と思ったのは間違いでした。彼らは体の内外からの放射能による被曝で、種の存続を脅かされているのでした。ゾーンでは天国と地獄が隣り合わせだったのです。原発の近くで見た、松の奇形があらためて思い出されました。どれもこれもが葉っぱが3本で、しかもパーマネントをかけたようにカールしていました。

（河田昌東）

腫瘍のある鹿



奇形の松葉

竹内さんのウクライナ便り

（キエフ　竹内高明）

国民アンケート　「Деньь」4／16，4／22号

・政党をどの程度信頼していますか？（16歳以上の3080人に）

ほとんど、あるいは完全に信頼している……12％　答えにくい……25％

ほとんど、あるいは全く信頼していない……63％

・現在の物質的苦境にいかに対応していますか？－複数回答－（同1200人に）

衣類、靴、住居の整備を意識的に制限している……75％

食料の質、量を制限している……51％

交通機関を必要不可欠な際にしか用いない、または運賃を支払わない…25％

家賃、公共料金を滞納している……20％　金、食料を借りる……18％

自分に必要なものであっても持ち物を売る……8％

これらの方法のどれ一つにも頼らない……10％

離婚戦術！？　「イズヴェスチヤ・ウクライナ版」4／18号

ザポロージェ原発の従業員の平均月収は340グリブナだが、現金支払いは104グリブナ。残額は、指定店舗でのみ使用できる商品券で支払われている。しかしこれら店舗での物価は、市場での価格より70％も高い。事ここに及んで、従業員の妻たちは「離婚戦術」をとり、養育費という形で現金を手に入れようとしている。1日あたり25件の離婚申請がなされている。

チェルノブイリ事故被災者・統計省のデータ　「Деньь」4／25号

・事故処理作業従事者総数…321万3326人

うち第1ｶﾃｺﾞﾘｰ…4万1221人　第2ｶﾃｺﾞﾘｰ…25万2939人　第3ｶﾃｺﾞﾘｰ…6万9620人

・チェルノブイリ事故被災者総数…176万3909人

うち第1ｶﾃｺﾞﾘｰ…1万8361人　第2ｶﾃｺﾞﾘｰ…8万6727人　第3ｶﾃｺﾞﾘｰ…48万9017人　第4ｶﾃｺﾞﾘｰ…116万9804人　被災児童…108万3107人　扶養者を失ったため特典を得ている家族…5121家族

・障害者年金を受けているものの総数（上記の人のうち）…13万5314人

1級障害者…1万5699人　2級障害者…7万8234人　3級障害者…3万8659人　障害者児童（15歳以下）…2744人

・放射能による汚染地域に住んでいる住民の数

立入禁止区域（第1ｶﾃｺﾞﾘｰ）…497人（ｼﾞﾄｰﾐﾙ州ﾅﾛｼﾁ・ｵﾌﾞﾙﾁ地区のデータは欠如）

汚染がひどく移住すべき地域（第2ｶﾃｺﾞﾘｰ）…1万2530人　13歳以下児童…2334人

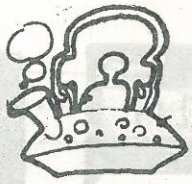
移住希望者は移住できる地域（第3ｶﾃｺﾞﾘｰ）…64万7012人　同　…15万6672人

放射能厳重監視対象区域（第4ｶﾃｺﾞﾘｰ）…170万4973人　同　…37万738人

・放射能による汚染地域全体の住民数

総数…236万4994人　13才以下の児童…54万9748人

文　通



多くのご応募ありがとうございました。

先回ポレーシェで呼びかけた「チェルノブイリ被災者との文通」に沢山の方々から応募をいただき、有り難うございました。「朝日新聞」「月刊リサイクルニュース」などでも紹介されて、30 名ほどの方々から申し出をいただきました。ロシア語を学習しているグループも引き受けて下さいました。56 名の被災者のほぼ総てに文通の相手が出来ました。

今後とも、文通交流が生き続けるように、事務局もバックアップ体制を整えていきます。　翻訳ボランテイアの皆様、これからもよろしくお願いします。

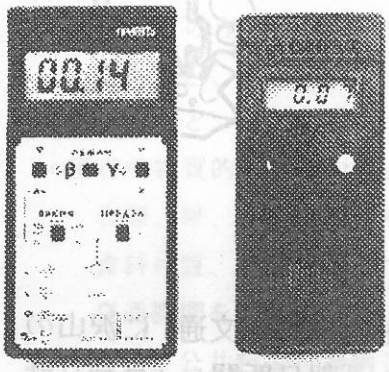
（松田）

被災者からの手紙集（第２集）が出来ました。救援・中部が、事故 10 周年を期に出した手紙に対する 56 名の方からの返事です。被災地での生活が良くわかります。ご希望の方は実費・送料として 400 円切手、又は現金 400 円振込みでお申し込みください。

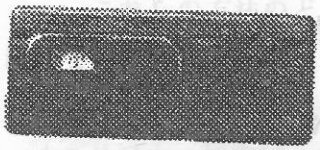
（事務局便り）

４月末からの連休明けもつかの間、５月 12 日にはウクライナからジトーミル州立小児病院のオルガ・ザハルチュク医師の来日、そのための準備、14 日はウクライナ訪問団５名の出発、と目の回るような忙しさでした。訪問団帰国までの２週間はさぞかしゆっくり出来ると思いきや、文通希望者からのひっきりなしの電話、資料発送、アレンジなどで事務局の松田さんは休むひまもありませんでした。それでも、各地からの電話はさすがに減って、一時の静寂は味わえました。さて、代表団は宿題をどっさり抱えて 28 日無事帰国しました、次号までのお楽しみ！（河）

救援・中部のすぐれものグッズいろいろ



(a) (b)



(c)

● 放射線測定器

手軽で精度の良い放射線測定機をウクライナから輸入しました。こんな物を使わないですめば良いのですが・・・・・

(a) プリピアチ：チェルノブイリ原発の技術者達が使っています。β線、γ線の区別や、空間線量率、被曝線量、表面線量率などの区別が出来る。

(b) シンテック：国際標準の被曝線量率が計れる。単位はマイクロ・シーベルト/時間。切り替えスイッチで百倍までの強度に対応。

(c) マスター・ワン：環境レベル測定用。国際標準の被曝線量で表示。

値段は： (a)30,000 円 (b) 10,000 円 (c)7,000 円

● チェルノブイリの本

「とどけウクライナへ」：1,600 円

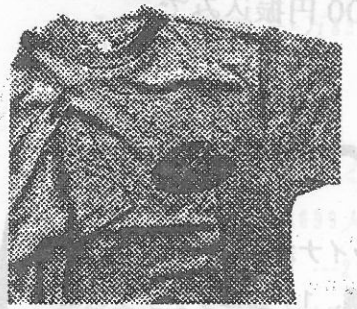
坂東弘美著（八月書館）私達の活動紹介。

「たった１回の原発事故で」：500 円

救援・中部編（地湧社）被災者からの手紙集。

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」：1,300 円。

チェルノブイリ支援運動・九州編



●Ｔシャツ（Ｌサイズのみ）：1,500 円

●チェルノブイリの子ども達の絵はがき集：５枚組　300 円

●チェルノブイリ救援・中部のシンボル・マーク・シール

（美しいカラー刷、鞄や車などに貼って！）：200 円

その他、丸木　俊さんのポスター（500 円）などもあります。

チェルノブイリ救援・中部の収支報告

（1996年4月から1997年3月まで）

収入の部

項目			金額（円）
前期繰越			6, 552, 593
救援寄付金（内訳）	小計		8, 481, 366
	個人	1053件	5, 391, 959
	団体	45件	3, 089, 407
国際ボランティア貯金交付金			11, 074, 000
外務省援助金			2, 100, 000
運営費関連（内訳）	小計		5, 359, 815
	個人	283件	1, 727, 815
	団体	17件	3, 632, 000
物品売上			497, 676
預金利子等雑収入			39, 142
収入総額			34, 104, 592

支出の部

項目		金額（円）
救援物資関連		14, 731, 873
（内訳）	医療機器代	4, 728, 541
	医薬品代	6, 006, 772
	輸送費	1, 078, 635
	粉ミルク代	2, 862, 300
	国際通信費	55, 625
医師研修費		912, 153
コヴァレフスカヤ講演会		151, 852
ウクライナ訪問団		1, 163, 196
竹内氏留学関連		371, 858
翻訳代		60, 706
ナロジチ支援金		3, 004, 162
セルゲイ君支援金		82, 000
運営費関連		5, 337, 959
（内訳）	郵送費・通信費	541, 311
	電話代	893, 719
	印刷費	238, 903
	国内出張費	401, 450
	会場費	64, 700
	備品・消耗品	192, 032
	人件費	1, 511, 558
	家賃・光熱費	536, 041
	ボレーシェ発行費	807, 854
	雑費（振込み手数料な	120, 391
	物品購入費	30, 000
小計		25, 815, 759
次期繰越		8, 288, 833
支出総計		34, 104, 592

チャリテイー・コンサートのお知らせ

・・・・チェルノブイリのこどもたちのために・・・・

時：6月19日（木）午後6時30分

所：聖ルカセンター（愛知県尾張旭市東大道町原田68）；TEL：0561-53-8937

名鉄瀬戸先尾張旭駅から北東徒歩3分

入場料：2000円

チェルノブイリ救援・中部事務局（TEL：052-836-10773）まで

予約をお申し込み下さい。

演奏：日本音楽家ユニオン、名古屋フィルハーモニー交響楽団

演奏・指揮：諸岡研史

曲目：モーツアルト（アイネ・クライネ・ナハトムジーク）など。

お話：神野英樹（救援・中部代表）

主催：愛知聖ルカ教会・聖ルカセンター

共催：チェルノブイリ救援・名古屋

ユーリさんからの手紙 （要約）

息子のセルゲイの健康状態をお知らせします。血液のデータはだんだん良くなっています。５月の断層Ｘ線撮影装置の検査の後で、息子の状態についてもっとはっきりした情報が得られるでしょう。

お金の使途と残高のことですが。あなたがたからお金を送って頂いてから、息子の薬を作っている人が薦めたとうりにその量を増やしました。その代金は250$、ほかに検査と他の薬で1月に合計300$位かかりました。残高で6月までは足りるでしょう。

今私は仕事で手一杯です。妻も働いていますが二人の月給を合わせると200$位です。いま家賃は、一カ月電気、水道、ガス代を含めて70$位です。今多くの人が、病気などの問題がなくても家賃を払えません。私も1年まえから払えなくなりましたが、息子の治療が終わったら払い始めようと思います。今使っている薬を、秋の間にだんだん減らしてから止めることに決めましたが、もしお金が足りなければもっと早く止めるでしょう。しかしそれでもできるだけ治療の全クールを最後まで行いたいと思います。もちろん、あなたがたから頂いた援助はもうとても大きな役割を果たしましたから、私は援助を続けて頂くようにお願いするのは気が進みません。

９７．０４．１３　　ユーリ

セルゲイ君支援金は４月３０日現在で総計２２５，１７１円になりました。５０人１団体のかたにご協力頂き、中には、毎月定期的にカンパして下さる方もあります。心からお礼申し上げます。セルゲイ君の病状も随分良くなって来ましたので、せめて今年一杯支援を続けて行きたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。

☆お問い合わせ　　チェルノブイリ救援・岐阜　TEL/FAX 058-272-2348 新田幸子

☆カンパは郵便振り込みで

口座番号００８５０－５－６５３１「チェルノブイリ救援・岐阜」

通信欄に“セルゲイ君支援金”とお書き下さい。

編集後記

＊梅雨があけたら、キエフの竹内君が一時帰郷する。
移住基金のドンチェバさんも一緒に!?（市川）

＊救援物資の中の「竹トンボ」に、 3,000円／個の手数料。「折り鶴」が紙製品だという事で、やはり 3,000円／個の手数料。移住基金は、自費でその費用を払ってくれた。国の台所が苦しいとはいえ、ひどい国だ。厳重に抗議中！（J）

＊ゼレムリヤ診療所のスタッフ達のペットを知っていますか？
何と、乳牛なんですよ！お昼休みに、村はずれの牧草地まで、散歩に連れていくのです。本当！大切な家族のようでした。（美）

＊去年の今頃は、ウクライナにいた。代表団の話を聞いていて、咲き誇る花の美しさを思い出した。一面にポプラの綿毛が飛び…やがてウクライナは夏！（京）